

第三章 脱獄行・つめ落し作戦

1

北神拘置所は周囲八百メートル、赤煉瓦塀の内部にはさらに仕切りの壁がいくつもある。獄舎は並列型舎房で、雑居房・独居房、それに女区と呼ばれる女性を収容する棟と合わせて八つの建物があった。

正門の脇には看守たちの官舎が三十棟あまりある。通常時なら家族も一緒に住んでいるのだが、今は部分が疎開してしまい一人住まいの看守が多かった。

ここだけは木造平家建ての長屋で、古い官舎なので、貧民窟の観を呈していた。南門を入った一部にも官舎が数棟ある。こちらは、二戸建てで看守長(典獄)などの住居があった。

赤煉瓦塀の中にあるコンクリート塀は五メートルほどの高さで、官舎を除いた領域四分の三がこのコンクリート塀によって二分されていた。

正門から見て右半分が雑居房舎の四棟、左半分が独居房に懲罰房である。

尾形玉江は女子房のある独居棟の住人になった。

一棟だけが女囚を収容するために用意されている。毛を四枚支給された。板床の上に一枚を敷き、三枚を掛け布団にして眠りに就く。

就寝時間は午後九時三十分である。

毛布から顔だけを出し、あらためて、玉江は独居房を見回す。天井は中二階ほどの高さになっていて、明り通りの窓が一つあった。

金網と格子がはまっている。長方形のその窓、今は外から板が打ちつけてあったので明り通りの用を果していな

い。首をめぐらせ、やや斜めうしろのもう一つの横窓を見やる。外に突き出している部分で出窓形式になっている。鉄格子の幅は十センチほど、条網入りの硝子がその向うには、はまつていた。今は燈火管制下なので黒いカーテンが前面には垂れ下っている。

この窓の上部には換気用の小窓がもう一つ開いていた。雨が吹き込まぬように、この出窓には上部に外庇ひさしがつけてあった。二十センチ四方の四角い出窓であった。もちろん人の通り抜けられる穴ではない。高さはほぼ二メートル、伸び上つてもこの小窓には手は届かない。

玉江は脱走の方法について考え始めていたのだ。遠くでこつこつと靴音がした。

やがて、独居房とその外とを距てる扉の鍵が開けられる音がした。耳をましていたら、がちやがちやと、もどかしい感じの鍵音がした。

この独居房の鍵を開ける時もやはり鍵を開けるのに時間がかかった。中風の気があるのか、旋錠、開錠する時に林看守は手が震えるのだ。玉江は林看守のそんな習癖をちゃんと識別していた。

玉江は林看守が好色そうな眼で彼女の全身を舐めまわしたのを思い出した。

きいと軋んだ音がして、独居房棟入口の扉が開かれた。こつこつと大儀そうな足音がそれに続く。扉の位置から十メートルほどの距離、まず最初に足音は三〇三号室の前で止まった。

扉上部のシキテン窓（視察孔）から林看守が中の様子を窺った。玉江は少しだけこの男を試してみた。

この寒い獄中では不自然だったが、毛布の裾を払い、白い二本の脚を露出させた。ふくらはぎから下の部分だけだったが、一見、寝苦しそうに装った。

拘置監の被告人め観察は特に念入りに行なわれなければならぬ。初犯者が多いから、自殺者や拘禁ノイローゼなどの症状を示すものもいるからである。

気付かぬふう玉江は乱れた寝姿のままじつとしてい

た。およそ二分ほどもシキテン窓からの観察は続いた。

誰れも知らぬことだったが、天江は妙なものを肌身につけていた。入所する時、素っ裸にされ、検身されたがうまく持ち込んだ。玉江は、かつての恋人だった葉室勝という男の陰毛を束ねたものをここ五年近くも肌身につけて持ち歩いてた。根元は糊で固められており、ちょうど毛筆の先のような形状になっている。

好きな男の体毛の一部は、かつて玉江が男の下半身から一本一本むしり取ったものであった。

湊川署に連行された時、その便所で紙入れから取り出し、玉江はおのれのひそみに指を入れて、この愛の遺形かたみを隠した。

今、林看守の眼を意識しながら、玉江は毛束の愛撫の道具で、やさしく股間を撫でさすった。

かつて愛し、今も忘れられない「葉室勝と」いう男のことを懐かしく思い出す。きまつてこの男のことを考えると玉江は異常興奮した。

林看守に見られながら玉江は秘やかに自慰の行為に耽った。林看守は、玉江の腰のあたりが小さく揺すぶられているのを眼にとめた。投げ出された足裏が急にとしほみ、内腿のあたりが擦り合わされていた。明らさまな行為ではなかった。

玉江も心得ていて、気をもたせるために、控え目には半身をさらした。数分後、やつと林看守はシキテン窓から離れた。

玉江は自分を閉じ込めている一枚の分厚い木製扉に眼をやる。錠前の金具は鋌打ちされていた。

その中心部に鍵穴があった。

上方に小指の指頭ほどの大きさの丸い穴があり、その下の溝部分は縦穴になっていた。一本の鍵があれば……。そんな思いでこの鍵穴を見つめた。

簡単な構造のように思えた。

外部から見る限りでは三センチほどの縦穴があるだけであった。錠前破りのことを刑務所ことばでは「つめ

落し”と言う。内蔵機構のつめをはねることができれば鍵は開くのだ。独居房を出、もう一つの独居棟出入口の外扉の二つの関所を破れば脱牢は可能であった。つまり、二種類の鍵があればいいのであった。

だが、独居棟を出たとしても外の世界にはあの高い赤煉瓦の外壁が待ち受けている。玉江は到底脱獄は不可能なように思えた。

顔の上に十燭光の明りがあつた。

観察を容易にするためで、一晚中明りが灯つているのが規則である。第一夜は、初犯者はたいい眠れない。だが玉江は明方までぐっすり眠つた。

夢を見たような気がしたが、どんな夢だったかは覚えていなかった。

戦時行刑の状況は当然のことながら、あらゆる面で不備であつた。まず、刑務官の確保がむずかしく通常時にくらべ、ほぼ半分ほどの人員しか配置されていなかった。

看守の出征による人員減はもちろんのこと、待遇もさほどよくなかつたので、軍需工として転職して行った者も少なくなかつたのである。

この手薄な状況のため、逃走事故・自殺・受刑者同士の殺人・傷害事件が各所で発生した。

かくて『逃走防止対策要綱』があらためて作られ、一年間無事故の刑務所には「鍊克旗」が授与されたりした。もっぱら、士気の高揚に刑務当局はつとめたのだつた。逃走事故の激増は、受刑者を軍需産業の徴用工として採用したために屋外作業の機会が多くなつたからでもあつた。

関東地区の東京船舶部隊、千葉刑務所の干潟作業所、前橋刑務所の石川島分隊。

東海地区の名古屋刑務所の第二造船奉公隊、横浜刑務所の第一少年造船奉公隊、川崎炉材特設隊、甲府刑務所の鵬翼部隊。

また、新潟刑務所の特設工作部隊、長崎刑務所の長崎造船護国隊など、大部分の刑務所、刑務支所が徴用工を送り出していた。

逃走事故と同時に、敵機の来襲により受刑者の中からも多くの死傷者が出た。

昭和十八年の夏に発表された逃走事故件数はほぼ半年で四十四件、うち構外作業は逃走三十一件を数えた。

その原因分析を記した文中には、「最近ニ於テ土工、造船、造機等ノ構外作業ノ増加ニ基因スルトヨリ多ク又時局ノ影響ヲ受ケテ優秀ナル看守ノ採用難ヲ来シ或ハ多数練達ノ看守ヲ失ナイタル事モ亦其一因ト認メ得ベシ」

と、この間の事情が説明されている。

戦時下行刑のもう一つの特徴は、特別警務班を設置したことであつた。逃走事故の予防と捜査を目的に、受刑者の何人かを看守の代用要員として任命したのがこの特別警務班制度である。

看守の質の低下はこの特別警務員の採用によつても明らかであつた。

「看守長又ハ副看守長ヲ主班トシ看守部長又ハ看守 若干名及ビ最モ信頼スルニ足ル可キ受刑者若干名ヲ以テ組織ス」

その任務は一つは逃走や他の事故を防ぐための密告制度、また日常監視の補助業務とし、他に逃走事故が発生した場合の捜査要員の役目も負つた。

二日目、玉江は二〇九号室の女囚に運動場で声を掛けられた。

午前中の三十分間、運動時間は三日に一度ある。私語は厳禁であつたが金網を通して話してきた。運動場は独居房の出窓の外、その延長線上にあつた。それぞれ金網で仕切られている。

運動場の広さは畳三枚分の広さ、軽い体操ぐらい

なら可能だった。玉の隣りの房は空いていた。

その運動場に姿を見せたのは村尾志保と名乗る三十を一つ二つ越したと思われる女だった。

「あんた、殺つたんやてね。ここに居る女はみんなちよろいばかりやわ。ほら、いちぼん外れの中年女、あれは芋ドロボウの野荒し、亭主は戦死して小さい子供が五人もいる言うてたけど、どこまでほんまのことやろね。ここへ来た時、なぐられて、こないにお岩さんみたいに青ぶくれの顔になつて」

二人は出窓の壁にもたれわずかな日溜りに身をさらしていた。冬の空はどんよりしていたが、雲間が切れ薄陽が洩れていた。

「ここにところ敵機の来襲はない。」

二度、警戒警報が発令されただけだった。玉江はほんとうは女の話が耳障りだった。

外の状況をつぶさに眺め、逃げる時の算段を、それなりに探つてみようと思つていたのだ。

「あの隣りは、亭主が出征中やのに他の男と何回も乳繰り合うたんやと。男は向うの房にいて、毎晩寝る時間にお互いの名前を口の中で唱える約束ができてるんやて。よっぽど好き合うてるんやろね。二人の仲は裂かれても心は一つ、ああ、あほらし」

あとは配給物資の不正受配者に闇物資の購入者、当の村尾志保は、「わたしはちよつと手癖が悪いだけや」と言つた。いわずもがなのことも付け加えた。

「行かず後家やもん。好いた惚れたもあらへんのや。この戦争でますます男はんとは、縁がのうなつてしもうたわ」

「この世の中、アレしかあらへんのに、不幸なことや」

初めて、玉江が口を利いた。

「なに？アレして？」

村尾志保はちよつと呆れ顔で見返した。

「どうせうちなんか首くくられるんやからな。男はんと死ぬ思いしてみたいと言つ」ことや」

「……」

「あんた、なにもしたとないのんか？」

「あんなもん、ちつともようないで…」

「ええ男はんを知らんからや」

「なんや、担当さんみたいなこと言うんやね、あんた」

問い質したら村尾志保は林看守のことをちよつぷり口にした。

「あの爺さん、助平なんや。女囚のみんなが一度は口説かれててな。今夜あたりはあんたの番かも知れんよ」

玉江は話を聞きながら赤煉瓦塀の外を見ていた。

仕切りの運動場の前方は雑草の生えた小運動場になっている。赤煉瓦塀まではここから三十メートルほどの距離であつた。

外壁は内側に向けて角度が付けてあり、よじ登れない構造になっている。なにより五メートルの高さではとりにくくこともできない。赤煉瓦塀の下まで辿り着いたとしても、到底、塀を越えることは不可能であつた。

玉江の視線は塀の外の電柱に張り付く。電柱の頭の部分が塀の内部をのぞき込んでいた。

玉江が強い視線を向けたのは、長方形の紙風が碍子がいし引掛かつていたからである。

新聞紙で作られた足は半ば千切れていたが、それでも風に煽られてひらひらしていた。

この年の正月に、どこかの子供が揚げた風なのだろうか。弱いスフ糸が切れて一人旅をし、紙風は、ここまで吹かれて来たのだ。やがてからみついた糸が切れて、また紙風は自由な一人旅をするのだろう。玉江は羨ましい思いでその手製の紙風を見た。

ピーッピーッ。三十分が経過していた。その時、呼子笛が鳴らされ、女の看守が姿を見せた。

北門隅の望楼から今までは見張られていた。

赤煉瓦塀手前五メートルほど離れた場所にこの哨舎はあつた。人手不足の折柄、この望楼に看守が立つのは、運動時間だけのことである。

その日の午後、独居房突き当りの洗濯場で週一回の洗濯が許された。下着の差し入れや支給もないから玉江は着た切り雀の身の上だった。モンペの下の下着だけをとり洗った。

みんな同じようなもので国賊扱いの囚人たちのうち差し入れ品を所持しているものの数は少なかった。

洗濯をしながらも逃げる方法について考えていた。

洗面台があり、その上の棚に歯刷子や洗面具などが置かれている。玉江は逮捕された時腰にしていた日本手拭しか所持していなかった。

歯を磨く道具もなく、朝は指に塩をつけて歯を磨いた。そのときに思い付いたことだったが、歯刷子の柄で合鍵が作れないものかと彼女は考えた。

木の柄だったが、結構、材質の硬いものもある。手に入れるには誰れかのものを盗むか、消耗品として捨てられるのを待つしかなかった。

盗んだとしても騒ぎが大きくなるだけに違いなかった。物資不足の折柄、盗まれた者は黙っていない。捜検されればすぐにでも発見されてしまう。

それでも何とか歯刷子の柄を手に入れてやろうと玉江はあれこれと思いを探らす。

と、また、なれなれしく、村尾志保が隣りにやつてきてなにかと話しかけてきた。

朝の運動場での話の続きを聞かされる。

林亥之助は出征している息子の嫁と一緒に暮らしていた。官舎ではなく、拘留所近くの差し入れ弁当屋がその住いだった。

元々は弁当屋稼業だったのだが、このご時勢で商売が成り立たなくなつた。看守不足の折柄、拘留所側から頼まれて臨時の刑務官に任命されたのである。

息子の嫁は二十半ばの女で、林看守の話によると「わしを見る眼はあれは男を見る眼や。なんやかやと、わしを誘いよる。ほんまにおそろしい女子や」と、いうことになるのだが、村尾志保はちゃんと林看守のあり

ていを言い当てていた。

「話はあべへやで。きつとな、あの爺さんが言い寄るのや。そいで、嫁さんがな、気色悪いからはねつけるんとかやうか。そやろ、悪口ばつか言うつるのは、相手にされへんからやで、きつと」

この話は玉江にも頷けた。どこのだれとだれが怪しいとか、いい仲だとか、どどここの男に言い寄られているとか、夜になると訪ねてくるとか、みんな口さががない。この手の話は玉江の周辺にもいくつもあつた。

村尾志保から、林看守の欲求不満ぶりを聞いたこととで、なおのこと玉江は肉体を武器にすることに自信を持つた。

3

その日の夜はこのほか冷え込んだ。

六甲風おろしの強風が吹き荒れていて、獄舎にいても、びゅうびゅうと鳴る風音が耳についた。

林看守が三〇三号室の前に立つた時、玉江は声を掛けた。

「担当さん、寒うて寒うて、凍え死んでしまいますわ。この寒さなんとかならませんか？」

「あかんな。練炭持ち込むわけにはいかんものな。だれかて今夜は寒い。ま、体操でもしてぬくうなるんやな」
「あの、お願いがありますねん。わたしの下着まだ干したまま、そいで……」

昼間洗つた下着がまだ乾いていなかった。洗濯場に干したままになっている。

シキテン窓を通しての二人の会話だった。

「ほな、わしが持つてきたる。ちよと待つてや」

玉江は就寝時間なのに壁にもたれていた。立膝し素足をのぞかせていた。頭からすっぽり毛布をかぶっていた。小一時間して、林看守がもどってきた。

「二二二号、下はすっぽんぽんか。な、あそこかて風邪引

くでえ。乾かしてきてやったからはよはき」

食器差し入れ口からズロースと長袖のメリヤスシャツが投げ入れられた。

「あのな、まだ乾いとらんかったから、わざわざ練炭火鉢で乾かしたんやで」

恩着せがましく林看守が言う。

手にとつてみるとまだ暖かった。シキテン窓の向こうに二つの眼があるのはわかつていた。わざとらしく、ゆつくりと玉江は下着を身につけた。

林看守の眼には、はじらいを見せた玉江の姿態が見えた。モンペの片足を抜き、ズロースに片足だけ突っ込む。その間、空いたほうの手で尻を押さえた。

玉江はうしろむきになっていた。同じようにしてもう一方の足にズロースをからませた。

今度はちらと白い尻を露出してみせた。

林看守には、玉江の尻の割れ目がはつきり見えた。メリヤスの肌着は、やはり、うしろむきのまま身につける。上着を羽織るようにして肩にかけ、素早く身につけたので林看守の眼には裸の上半身は見えなかった。玉江はちゃんと男心を見抜いていた。

一度には見せてやらない。

「ぬくいわ。人肌みたいや」

「なんでも言い、わしは鬼の看守とはちがうよつてにな。ほな、おやすみ」

足音が去り、やっと玉江は一人になる。いやらしいことを想像した。練炭火鉢の上で生乾きの下着を乾かしている時の林看守の顔が思い浮かんだ。

尻まわりの大きさの分だけ下ばきは大きい。古いものなのでどこことなく締めまらない。

木綿地肌ざわりを楽しみながら林看守はどんな淫らなことを頭に描いたのか。

数日後には、着たきり雀では不便だろうと言い、モンペの古びたのを一着、玉江のために持ってきてくれた。玉江はどうやらお気に入りになったようだった。

実のところ、林亥之助は息子の嫁と今、冷戦状態にあった。一週間交替の昼夜勤務だから半分は二人だけの夜を過ごさねばならなかった。女盛りの嫁のことが気になり、夜はよく眠れなかった。

夏などは嫁の寝乱れた姿を期待してそつと二階家の階段を足音忍ばせて上ったりした。

そのくせ、戦地に行っている一人息子に心のどこかで詫びてもいた。自分が嫁に惹かれるのは、嫁にもそれなりの隙があるからだと言ひ訳を用意してもいい。子供もいなかったので嫁は暇を持て余しているようにも見えた。性を経験した女が一年半も男なしでは生きていけないとも考えた。

嫁が妙にそわそわする時は、きつと抱いて欲しいのだろうと思い、彼も気もそぞろになった。

銭湯に行つて肌を磨いてくるとまぶしくて見ていられなくなる。それで一度手を出した。

湯上り女の魅力に我慢がでなくなつた。
が、ぴしゃりとはねのけられた。

それ以後、用心して嫁は二階部屋で寝る時、ねじ締まりの錠を内側から忘れずに掛けるようになった。

隣り近所の者の評判のほども気になつた。

もはや、二人は男と女の關係になつているにちがいないと、尾びれをつけた話が、伝わった。

嫁はそれを耳にし、つい先日、実家の丹波・篠山に帰ることを申し出た。疎開したいと言つたが、ほんとうは、離れて暮らしたいというのが本音のはずだつた。

もちろん、玉江はこんな林看守の家庭の事情は深くは知らなかつた。断片的に村尾志保から話を聞かされていただけである。

ある日、村尾志保が探りを入れてきた。もらつたモンペを身につけたら嫌味なことを言われた。

「あの爺さん、そのうち嫁のお古持つてきてやると私には言つとつたのよ」

三白眼の白眼の部分が吊り上つて見えた。

“うち みたいに男はんの味がわかつてる女のほうが魅力があるのや”と玉江は面と向つて言つてやりたい氣がした。少しばかり勝ち誇つた氣になつた。

4

次の日の朝、洗面場でちよつとした騒ぎが持ち上つた。流し台の排水孔の破れ目から一匹のどぶねずみが走り出したのだつた。他の女たちは立ち疎んだが、一人、玉江だけは動じなかつた。

悲鳴もあげない玉江が見込まれて破れ穴を修理することになつた。流し台の下には金網でおおわれた排水孔があつた。直径七センチほどの丸い穴で、そこがねずみの通路になつていたのだ。

食事までの短い一時が、応急処置のために用意された時間であつた。

女看守から玉江が手渡されたのは、やつとこと、使い古した金網、それに割れ目を塞ぐ粘土であつた。

狭い流し台の下にもぐり込む。玉江は作業にかかると前に、粘土の塊りを千切り取つていた。

これで鍵穴の型どりができないかと考えたのだ。

排水孔の受け口の中を指で探つた。

歯刷子の柄でも吸い込まれてはいないかと思つた。

配水管の底辺部にはもう一枚、粗いゴミを選別するために金網が張つてあつた。指の先で金網の破れ目に手をつ込んだら指先に痛みが走つた。

硝子片のようなもので指先を切つていた。

女看守が、「なにか詰まつてるかもしれないからついでに掃除しておいて」と命じた。

咄嗟に玉江はその尖つた小片を指先にたぐり寄せていた。やはり硝子片だつた。

得難いものを手に入れた。

硝子片と粘土の塊りを上着の袖口に忍ばせた。

袖口にはゴムが入つていて手首を締め付けていた。

ものを隠すには都合よくできていた。

女看守は彼女の後ろに立っていたから、狭い場所にもぐり込んだ修理人の挙動は一切見えていなかった。女看守の足先だけが背後にはあった。

金網を張り終り、粘土でその周囲を固めてから玉江は這い出す。右手の中指の腹の部分がぎっくりと切れ血が溢れ出ていた。

「なんや痛いと思うたら、手を切つてしもうた」

女看守は驚き、応急処置のために、医務室に玉江を伴った。医務室といつても特別の部屋ではない

独居棟と隣接した看守詰所に救急箱が備えてあった。それで、玉江は図らずも詰所の内部を見るこゝとができた。

いちばん端が仮眠室、まん中の仕切り部屋が取調べ室兼待機室で、その隣りに便所と洗面室があった。

独居棟の外に出れば逃げるチャンスもあると玉江は思いを巡らせた。

薬箱から赤チンを取り出し女看守が傷口に塗った。他に看守はいない。傷をしていたためか、手錠は掛けられていなかった。

この女看守を無抵抗の状態にすれば逃げられると思つた。朝も早い時間、いまがいちばん忙しい時間帯である。背後に回ろうと思ひ、じりじりつと体をわずかに動かす。逃げる思案をした。

高い塀があるのに、どうやって越すのか？

ちらと考えたが先のことはそれ以上は頭にはない。隙のない眼を一点に注いでいた時、副看守長の男がぬつと入つてきた。強い視線に射疎められる。

「ちゃんと手錠しろ。お前の眼はそれは逃げる時のな」
凶星を指されていた。袖の中に隠したものを検身されたら絶対に発見されてしまう。

「三〇二号は特別のお客さんや。逃げられでもしたらえらいとやで」

手錠され、すぐに玉江は独房にもどされた。

逃走の機会を逸した。

玉江は独房の中ではじめてじっくりと硝子の小片を眼にした。牛乳壺の破片で、飲み口部分だったので厚味があつた。尖つた三角片の切口は鋭い。見つからぬように水洗便所の便槽の底に沈めた。

取っ手を自分で引くと水は出る。

当時としては贅沢な設備だつた。もともと貯め桶になつていて、流された汚物は拘留所内に一度集められてそこから外に持ち出される。自分で把手に手を掛けない限り、硝子片は流れ出すことはない。

粘土は二つに分け袖口に入れておく。

本来だと決囚は拘留中に何回かの取調べのために所轄の警察署に身柄を送られたり、公判のために裁判所に送致される。

だが、戦時中のことですべての手続きが遅れていた。

尾形玉江の殺人・放火・死体遺棄の罪についても、まだ一度の呼出しもなかった。

ただ、鍵穴を見て暮らすだけの毎日である。

硝子の小片を手に入れた数日後、玉江はまた一つの幸運に恵まれた。

運動時間に外に出たら、いつか眼にした紙風が、自分の房の換気用外窓に張りついていた。外庇の下部の隙間に危うい恰好で吹き寄せられていたのだ。

二日前に強風が吹いた。

電線に引つかつていた風は吹き飛ばされてわずかの距離だけ空中に舞つたというわけだつた。

房内からはわからなかったが、運動場に立つた時に発見した。風は今日は微風で紙風は死んだように張りついていたが、下から風が吹き上げれば、またふわりと空中に投げ出されてしまうかも知れなかった。

また隣りの金網越しに村尾志保が話しかけてきた。いつもは気乗りしないのに、風の存在に気付かれてはと思ひ自分から話し掛けた。

玉江は風の竹組み部分が、もしかしたら、鍵を作る素

材になるのではないかと考えたのだ。

「わたしはここでは模範囚なのや。みんなのな、まとめ役やるように言われてるのや」

「へえー、まとめ役でなにをするのん?」

「囚人は囚人同士、仲ようせなあかんやろ。それにわたし今度、防空要員にえらばれたのや」

「なにい?その防空要員て?」

「いつまたB-29が飛んで来るかも知れんよつて、いざというときは、受刑者の中からえらばれた防空要員が、看守と一緒に火を消すわけなのや。空襲警報が出ると、ちゃんと外に出してもらえるのや。少しは自由になるわけ」

「ほな、逃げる人かて出るやないの」

「あほやな。逃げるわけないから、えらばれるんやないの」

その間も、玉江は時々、横眼で風の張りついた高窓を見やる。三十分の運動時間が終った。

「うちは模範囚になつても外には出してもらえんわ。うちは死刑囚やからな」

ちよつと悲しそうな顔をしてみせる。

止んでいた風が、どこからともなく吹き寄せてきた。

やはり、風のことが気になっていた。

5

鍵穴のかたちを頭に描く。釘一本だつて開けてやると玉江は心に期した。今、手元には硝子片と粘土、それに紙風に使われていた竹の親骨、ひごがあつた。

高窓に張りついた風は苦心のすえ手に入れた。

なにしろ二メートルの高さ、窓の鉄枠にとりついたが、手は届かなかつた。考えあぐねたすえに、防空用にとりつけられた黒いカーテンを外し、房内の水洗便所の便器の水に浸してから、窓の鉄棒に固く縛りつけた。

二枚のカーテンを結び、何カ所かの結び目をつけ、そこを足場にして鉄棒をよじ登つたのであつた。

全体重をかければ、結び目はずり落ちて行く。

房内の隅から走り寄り、蛙が飛び付く要領で鉄棒を両手でつかみ体重を上半身に預けてから、結節に足をかけた。

あらかじめ、高窓部分に一本の竹を差し込んでおいた。カーテンレールの代りに使われていた丸竹で長さが一米トル半ほどあった。眼に付く限りの素材を利用した。吹き寄せられていた紙風を手前に引き寄せるのがまた難事であった。

片腕で高窓部分の鉄棒の一本をつかみ、体重を支えた。カーテンの結節に足はかかっていたが、重さを支えることは無理だった。

残った右手一本で丸竹を操った。

なかなか外に突き出された丸竹は風を引き寄せてはくれない。助かったのは、風の糸を竹の先からめることができたからだった。小さな風だった。

鍵穴の中の構造を知るためにすでに数度、鍵穴の隙間に粘土を押し込み、その可能性を探っていた。

鍵穴の内部は二重構造になっていて、一枚の鉄の爪が手前にあった。その奥が、鍵の共腹やもばら部分で、この共腹部分にぴたと合ったかたちを採取することができれば内部の構造を知ることができるのだ。

この頃の錠前は現在ほど構造は複雑ではない。

飛込錠もシングルの軽便錠といわれるもので、脱走囚の中にも折れ釘一本で開錠するものが多いいた。

内部はバネ仕掛もなく、ともかく共腹部分の雌雄のかたちで開閉される仕組みになっていた。

手前にある鉄の爪は釘一本で左右に開く。

もつともこの鉄の爪があるために粘土の出し入れは邪魔された。それで、細いひごを用い、あらかじめ鍵穴を開けておく。数本のひごは三〇三号室の外廊下にその先端部を突き出していた。

看守はほとんど見回らず、発見されることはまずない。もう一つ、粘土の中心部に小細工を加えた。押し

込む時はいいのだが、引き抜く時に困難がともなつた。鍵穴に指を突つ込むわけにはいかなかったそれで、自分の毛髪を抜き、数本を縫い合わせ糸を作つた。

この細工を思い付いたのは、葉室勝の遺形の陰毛からであつた。淋しい時・玉江はその毛先で唇を愛撫した。くすぐつたさの感じは葉室勝のやさしさを思い起こさせた。糊で固めた毛先を見ているうちにふとひらめいた。

食事の時にもそれとなく考えていたことだつた。

四六時中、玉江は逃走手段のことに頭を費やしていたのだ。入所以来、玉蜀黍やもうろこしが半分以上も入つたばらばらのめしが木椀に半分支給されていた。茶碗一杯半だけあとは満州大豆にうずら豆、時には稗が混入された。それで玉江は食事をおいしく食べる方法を自分なりに見つけた。

「喫飯！」

の号令がかかると、混入されたものから先ず口にした。残つた米麦の中から箸先で麦だけを拾う。最後に米飯が残る。一氣にかき込む。

その楽しみの分を残し、細工に用いた。

よく噛んだめし粒で鍵穴に似せた平べったい形状を作り、その中心部に毛髪を埋め込んだ。

その回りにも数本の毛髪を装着する。平べったい鍵型の糊の板に、毛髪が七、八本生えていた。

わずか一・五センチほどのひょうたん型の糊の板である。乾いたら強固な蓋のようになった。

これは粘土の軟らかさを補うもので、玉江は糊板を粘土で固め、ひごで開かれた鉄爪部分にこれを押し込んだ。糊板部分は外廊下側に押し出されている。固さがあるので、手前に引く時、粘土のかたちが崩れないのであつた。

引つづる時は、毛髪を引く。数本の毛髪は力が分散すること、粘土にひび割れが、生じない。粘土そのものは長時間おけば乾いて来る。

むりやり押し込んだ粘土は五時間もたつと乾いてきて

、鍵の内部で外側に一杯に開かれていた。
共腹部分が内側にと押され縮小する。

半ば乾いた段階で、鍵穴の周囲に差し込んでおいたひごを抜く。外側部分との附着がこれで防げた。

五時間も気付かれずに、この細工をするには夜間しかなかった。

空襲警報でもない限り、夜の十一時以降、翌朝六時三十分までは、この監舎には看守は出入りしなかった。巡視は規則では夜間に三回行なわれることになっていたが人手不足で実施されてはいなかったのだ。

玉江は数回の失敗ののち、やっと内部構造を知る手立てを得た。共腹部分の三段状のコピーを粘土面に印象させた。鋳型ならこのまま溶鉄を流し込めば一本の鍵を作ることができるのだがそれは不可能だった。それで、玉江は、入手した風の親骨部分を使つて鍵を作ること考えた。

竹の性質は都合のいいことに折れない特性を持つていた。スライディング・タンブラー錠は弾機部分さえ押すことができれば容易に開錠する。

玉江は鍵を作ることに自信を持った。
なぜ、ここから逃げ出したいのか？尾形玉江の愛人、「葉室勝」はすでに死んでいたのだが、その菩提をとむらうのは自分しかないと彼女は思っていた。

人知れぬ場所にこの世でいちばん好きだった男性は眠っていた。それを知っているのは玉江だけだった。どうせいつかは死刑になるのだ。だったら一つしかない命、葉室勝のそばで永遠の眠りに就きたかった。捕まってもともと、それだけに玉江は大胆になれたのだ。

一本の竹製の鍵を作るには風の親骨部分は横幅がなかった。髪の毛を握り合わせた糸が役立った。二本分の竹を一つにし、その糸できつく縛った。

押型を採った共腹部分に合せて、硝子片で竹片に刻みを入れて行く。

鋭利な刃物ではないからたやすくは削れない。

この日で入所以来十三日が経過していた。

やつと、押型に似た形状の一本の竹製の鍵ができ上つたのは、小道具を手に入れてから五日間が過ぎた日のことであつた。

午後五時。もう房内は薄暗くなりかけていた。

夕食は四時半に終つた。これからの就寝時間までたつぷり時間はあつた。そつと鍵の穴に、竹の鍵を差し込む。なんの抵抗もなく、前面の鉄の爪を分け、鍵先はすつと入つた。差し込む深さを測るために、中間部には刻みが入れてある。

共腹部分にぴつと適合するようにしるしがつけてあつた。深く差し込んでも浅く差し込んでも弾機ははねない。玉江は左側にと回す。

かちやと音がすれば成功だつた。が、弾機が軽くはねる前に、竹がしなり、共腹部分と共調しなかつた。

竹の強さの特性であるしなりのために、鍵の先端部に力が加わらないのだつた。一本、二本と、玉江は自分の毛髪を引き抜いた。縊(より)り糸を作つた。

それをつなぎ、三メートルほどの長さの糸にする。その糸を竹の鍵に丹念に巻きつけた。寸分の隙もないようにきちんと糸はそろえて巻く。

一本の黒い鍵になつていた。

毛髪で補強された鍵は、先端も含めて固い棒状のものになつた。ゆつくりと差し込み、共腹部分の感触を探つてから左にと回す。

玉江の執念が実つた。かちやりと軽い音がした。急に鍵先が軽くなつていた。

共腹部分の弾機が共調していた。開錠の音はたしかに軽かつたが、完全に回り切つた時の音はびつくりするほど大きな音だつた。

夜間のことで、もし誰れかが起きていれば、この鍵音は耳にしたかも知れない。

この独居棟には七人の女囚が収監されている。

開ける時は、ただ夢中で鍵を回したのに、閉める時

は臆病になった。

村尾志保はどう考えても拘置所側のイヌだった。もしかしたら耳をそばだてて、次の鍵音を聞きとろうとしているかも知れない。

だが、鍵を開けたままにしておくことはできなかった。朝の点呼時には、女看守が二人、開錠して回る。それでも用心して小一時間は待った。

房内でじつとしていたら夜が明けてくるのがわかった。冬期のことで東の空は白んでは来なかったが、高窓から朝明けを知らせる藍色の気色が忍んで来た。

気が付かなかったが、コンクリート部屋は朝の冷氣に凍てつくような寒さになっていた。

手足が冷めたくなっていた。吐く息が白くなっている。どこかの囚房で誰れかが、その時、咳をした。この寒さに眼が覚めたらしい。それで、玉江は差し入れた鍵を手にしたまま次の機会を待った。こんこんと高い咳音がした。機をのがさず鍵を元通りにもどす。

あらためて自分が作りあげた鍵の絶妙さに心が躍った。精巧な一本の鍵だった。

その夜、空襲警報が発令された。

玉江はすでに自房の合鍵を所持していたが、独房棟から外に出るもう一本の鍵は持っていなかった。

同じ要領で外に出るための鍵を用意するのは至難の技だった。竹材はまだ持っていたが、条件が違っていた。夜間しか時間はないし、合鍵を開けて出入しても、通用門のあたりは暗くて手探りの作業になつてしまう。別の方法を考えるべきだった。

空襲警報が発令された時、例によつて村尾志保が防空要員として独居房棟から外に出された。

俄かに外では人の声が沸き起り、房内にはスピーカーを通して避難の際の注意事項が放送される。この機をのがさず、玉江は自分の錠を開け、脱出を試みた。偵察するために、外廊下に出てみたのだった。がらんとした外廊下の西側には監房がそれぞれ

十五室、右と左に別れて並んでいる。

外廊下に出てはみたものの、そこから外に出ることは不可能だった。

通用門の鉄扉に手をかけてみたが旋錠されていた。玉江は用もないのにうろうろするのを止めた。

一度、三〇三号室にもどり、使い残しの竹材や糸などを持ち出し、外廊下の突き当りにある洗面所下の排水孔にこれらの材料を隠した。

何かの時に持ち出せるし、部屋を捜検された時に発見されたらすべての計画がむだになるので用心のためにも早目に手を打った。

間もなく、空襲警報は解除された。

玉江は自房にもどり、シキテン窓をひごを使って、そつと開けた。楊子ほどの長さのもので上衣の襟元にいつも隠してあった。

もしかしたら……この前の空襲警報の時に気付いた疑問点に今夜ははつきりした答えを出したかった。

通用門の鍵を開ける時の林看守の鍵の音の回数を聞きとろうと玉江は扉のそばに寄ったのであった。

村尾志保が独居棟から外に出ていた。

警戒警報が解除されると林看守にともなわれて村尾志保はもどつて来る。

数分後、警戒警報も解かれ、二人がもどつて来る気配があった。じつと耳を澄ます。

あの、どこことなく落着かぬ感じの開錠の音がした。少しふるえる手で、林看守が通用口の扉を開けた。問題はその次の手続きである。

そのあと、林看守は扉を閉めるのか、閉めないのか。本当なら来る時と帰る時、それぞれきちんと開閉したら都合四回の鍵音がしなければならぬ。

前回、林看守は帰る時、一度だけしか鍵音をたてなかった。玉江の疑問はこの一点にあった。

開錠する音が聞えた。が、その場で旋錠する音は聞えなかった。少し高声で話しながら、二人が、三〇

二号室前の外廊下を通り過ぎた。

念のために、林看守の帰路の動作に注意を注いだ。向い側のいちばん奥の房が村尾志保の居室である。通常どおり送り届け、もどつて来るのには二分とはかからないのに、五分余りが過ぎた。

話し好きの林看守は女一人の部屋に入り込んで、また息子の嫁の悪口でも言っているのだろうか。いや、もしかしたら二人はもうできていて、寸時を惜しんで性の行為に励んでいるのかも知れない。一度、玉江も林看守の夜の訪問を受けことがあった。

できることなら腰にぶら下げた鍵束を奪つてやろうと隙を窺つた。体を擦りつけて行つたらちゃんと林看守は玉江の体を抱き止めた。

「ええ体してる。こらあ、はずんでるでえ」

林看守は玉江の首筋に鼻をくっつけて匂いを嗅いだ。そのくせ、やはり用心していて、腰にぶら下げていた鍵束をわざわざ外し、ズボンのポケットに入れた。

「わいも殺されたらだもならん。ええ思ひはしたいけど、襲われんとも限らんな。猛獣は飼ひ慣らしてからや。はは、用心、用心……」

そのくせ、胸元から手を入れ、玉江の裸の乳房をつかんだ。

つめたい手だつたので玉江はその時、悲鳴をあげた。

林看守と村尾志保はよろしく乳繰り合っているのではないかと思つた時、独居房から林看守が出てきた。独居房の鍵をおろす。

そのまま、すたすたと歩いて通用門の扉の前に立つた。鍵音が一度だけなら、玉江にも逃げるチャンスがある。期待に胸がどきどきした。

開錠の音はせず、旋錠の音だけが玉江の耳には届いた。つまり、林看守はこの独居棟に入る時、逃げる心配のない村尾志保に安心してか、扉は開けても閉めないのだつた。

前回とこれで二度同じ油断を見せたことになる。

玉江は張り詰めた神経のおかげで、この好機を知ることができたのだった。

翌日、浮き立った顔の玉江に、村尾志保が声を掛けてきた。狭い小運動場での運動時間は人手不足でこれから一週間に一度になると言う。三日に一度だった入浴時間も先週から週一度になった。

燃料不足がここでも深刻になっていたのであった。

あわせて、村尾志保は、殺人犯の女が逃げる気を起さないよう教訓話も口にした。

「おとといな、男の独居房で逃走騒ぎがあつたんやと。よび込みいうて、電灯が消えたから替えてくれいうて看守が中に入ったら、たたき込み強襲に遇うて軽い怪我したそうや。すぐ捕まつてしもうて、いま、重屏禁処分でな、窄衣されてんやと」

「なに？そのさくいて？」

「馬皮で作った剣道の防具みたいなものや。それで胴体包まれてな、締め上げられるんやと。えらいきつい懲罰らしいで。法律でも六時間以上続けてやったらいかんそうや。その逃げようとした男もな、額から脂汗流して、息も絶え絶え、この食糧不足の時代やもん、もうちよつとで死ぬとこやつたんやて」

「逃げたかて、外のほうがいまの時代は、暮らしにくいのにな」

玉江はうまくかわす。

「それでな。ここ二、三週間うちに逃走防止の特別班が編成されるそうや」

村尾志保の話だと、受刑者の中から成績のいい者を選抜し、夜間の巡警を強化するのだという。また、巡警隊は、逃走者追跡時には特別捜査隊の任も負うと教えられた。

これは、受刑者に戒護の役目を分担させることから一歩すすんで捜査の役目も負わせることになったことを意味していた。

所屬受刑者ハ設備内又ハ作業所及ビ其ノ附近ノ
捜査ニ限ルコト

受刑者ニ武器等ハ之ヲ携帯セシメザルコト

この制約条項はついていたが、公式通達が出され制
度化していたことであつた。

この村尾志保からの情報で、玉江の決心はさらに
強いものになつた。戦時下のことで、逃走事故その他
の事故が多発していた。全体的に管理が甘くなつてお
り、ここ北神拘置所でも人手不足で規則どおりの
刑務は遂行されていなかった。

本来ならあるべき、居房捜検、検身、携行時の手錠
、各通用門の嚴重監視体制、収容者の動向監視
などがおろそかになっていた。

玉江はただただ敵機の来襲を願つた。

混乱に乗り、逃げるしか術はなかつたのだ。

それに、逃げるなら今のうちだつた。

一日、二日……緊急事態を知らせるサイレンの吹鳴
はなかつた。

あの、何の役にも立ちそうにない林看守までが翌
日、居房捜検のために各房を点検して歩いた。

竹材の残りを処分しておいて助かつた。

「あさつてになるとな。典獄さん直々に居房捜検や。
そいで間違ひがあつたらいかんよつてにちよつと見回らせ
てもらつて」

玉江は手製の鍵は襟の内側に縫い込んでおいた。
あの硝子片はまだ便槽の底にあつたが、手を深く突つ
込まないわからない奥のほうに隠してあつたので、林看
守には発見されることはないと思つた。

それでも玉江は用心のためにこの前のように体のほ
うに林看守の注意を向けさせた。

「あのな、うちは男はんがおらんとあかん体なのや」

「ぶつそなことを言ひよるな。そやけど、ここでは、どもな
らん」

「うちはな。猛獣とはち違うで。ちよつとさがりがついてるだけや」

「ほんまにさせるんか。そら、据膳食わぬはなんとやら言うてな。よつしや、うまい」とわしが二人だけになる機会つくつたるから待つとれや。ただしそんな時はお前には両手錠やで、わかつとるやろ」

「やなうちや、両手錠なんて」

「あのな、諏訪山動物園の猛獣もこのご時勢や。みんな首締めて殺したそうや。おまえはどう考えてもここでは虎か熊や。させてもらうほうも命がけではええ思ひはでけんやろが。寝てる猛獣の首にな、マシロープを二重に巻きつけておいてな、檻の鉄棒の端に固く結んどくと、猛獣が起き上った時には、きゅつと首が締まるんやと。もがけばもがくほど首が締まるわけや。わしの知り合いに飼育係の男がおつて、可哀想にな、その男の話やと、白熊がいちばん苦しんで、絶命するまでに七分もかかったというつた」

その時の玉江の眼は異様に光っていた。

菅家吉蔵を殺害した時の状況とそっくりだった。

眼が吊り上っていた。

女でも玉江は腕力はあるほうだった。この男の首を締めてやろうと瞬間のこと考えた。

両手をぎゅつと握りしめた。隙を窺った。

「おお、こわ、お前の眼は獲物を狙う猛獣の眼になつとるで」と真顔で言った。

「あほなこと、うちは男はんに襲われたいと思つてるのやんか」

口先でごまかす。が、玉江の唇の端は、このとき、引き吊つていた。

その夜、空襲警報が発令された。

林看守は引き続きの勤務で夜間もいた。

時刻は九時を少し回った頃であつた。

村尾志保がいつものように連れ出された。

そつと、遮蔽幕の黒いカーテンを明け窓の外を見る。大倉山高射砲隊が発するサーチライトが二条、遠くの空で交錯していた。B29はこの時期、すでに無差別爆撃を開始していた。

記録によると神戸市街には昭和二十年二月には都合十四回来襲、延百八十機が飛来していた。

死者五十名以上、罹災者六千三百余名の数字が残っている。

玉江は、三〇三号室の錠前をはね、いつでも飛び出せるように用意を整えた。看守らは防衛体制を敷くために、各所に分散配置されているはずだった。

三十分後、空襲警報が解除され、続いて警戒警解かれた。まだ、常態には戻っていない。

周囲は手薄な状況にあるはずだった。

玉江は三〇三号室から外廊下に出た。外廊下の明かりは消されていた。闇にまぎれて、すばやく、通用門まですすむ。扉のそばに下駄箱があつた。

小さなもので完全には体は隠れない。

だが、構内潜伏やりすごしには一時的には役に立つ。この夜は警戒警報が解除になっているのに、一向に村尾志保はもどつて来なかった。

いつもより長い。

玉江にはとても長い時間に思われた。

十五分ほどおくれて、やつと二人の足音と、村尾志保の高声が聞えてきた。がちやがちやとまた中風の手が震えるのか、不規則な音がした。かちんと乾いた音がし、通用口の鉄扉が外から押される。

ぐていねいなことに、通用門を入ったところで、名残りを惜しむように二人は正面向きになり抱き合つた。時間のズレた分だけ、二人は愉しみの時間を持つていたのかも知れない。

林看守には扉を開けたあと閉める心の余裕など

なかつた。

「ええか、今夜のことは誰れにも内緒やで」

村尾志保の耳元に林看守が囁いた。男の手が、女の腰に回り、二人は連れ立って歩き始めた。

玉江は四つん這いになり、コンクリートの床をそり、そりりとすすむ。まだ外廊下の明りは灯されていない。後ろを見ると肩を並べた二人が独居房の一つに入るところだった。

まだ、情事の余韻を愉しむ気らしい。

その隙に、玉江は独居棟の建物からすりりと抜け出した。中扉は旋錠されていなかった。

通用門を出た二メートル先に、看守詰所があった。この詰所は女子監舎の附属設備である。

夜間は林看守だけになる。

その詰所の前をすり抜ける。建物の端に立つ。

女子監舎と同じ造りの建物が何棟か行儀よく並んでいるのが見えた。その逆の側は赤煉瓦塀となる。そちらの方角には調理場、食糧庫、備品倉庫などの独立棟が並んでいた。

どの建物も夜間は無人となる。

外に飛び出したもののそれからの算段はつけない。

ともかくも無人の領域へと玉江は走った。

建物の陰を伝い、その都度立ち止まっては様子を窺う。視線の向うに五メートルの高さの赤煉塀があった。見上げると、とてもない高さに思われた。

身長の一、四倍はあるのではないかと、玉江は怖れに似た気持ちを抱いた。

隣りの調理場の屋根を見た。ボイラー室の屋根から、長さ三メートルほどの煙突が突き立っているのを眼に止める。玉江は突飛なことを思いつく。

あの煙突をへし折って、赤煉瓦塀に立てかけることができたら……と本気で考えた。

身の軽い玉江はその可否を考える前に、調理場の屋根に身を翻していた。煙突に取付き手で押して

みた。直径七十センチほどの細い煙突だったので女の力でも何とかなると思つたがむりだつた。

わずかに根元が揺らいただけで引き倒すことはかなわなかつた。屋根に上つて下を見下ろした時、赤いペンキで示された消防器具格納庫が見えた。

あの中には、梯子とホースが納められているはずだつた。玉江は逃走具のあり場所を嗅ぎつけた。

だが、格納庫には南京錠が掛けられていた。

鍵さえあれば……ふとその時、看守詰所の光景を玉江は思い出した。

いつか、怪我をして詰所の内部に入った時、控室の壁にいくつかの鍵束が掛けてあつたのを眼にした。鍵を奪おうと考えた。

調理場横に積んであつた薪の一つを手にした。

ポケットには尖つた硝子片も入つていた。

再び、女子監舎の端の看守詰所にもどる。

燈火管制中なので詰所の窓はどこも黒い布で目隠しされていた。隙間から見ると、林看守が練炭火鉢の火を起こしかかつていた。

風はかなり冷たく、玉江の手足も寒さためにかじかんでいた。赫々あかあかと燃えた炭火の上にまだ火の点かない豆炭がのつていた。

玉江は戸口に回つた。中に押し入ろうと考えた。

と、その時、林看守が立ち上り七輪を持ち上げた。豆炭は着火する時一酸化炭素を出すので、外に出しておくことが多い。

玉江は入口のほうに、にじり寄つた。

案の定、まず扉が開き、それから少し震える手で七輪を持った林看守が外に出てきた。

コンクリートの床の上に座り込み、うちわでぱたと風を送りこむ。玉江は隙を窺つた。

足元を吹き過ぎた風が向きを変えていた。

林看守が七輪の位置を変える。ちようど、玉江に背を向けた。そつと忍び足で玉江は背後に立つ。

手にした薪を振り上げ、林看守の後頭部に一撃をくれた。「うえっ！」咽喉笛が絞られるような切迫した声を発した。前に倒れ込む。

その拍子に七輪の上に上体がかぶさり七輪が引っくり返った。豆炭がころろと転がり、火種の炭が風に煽られてぱちぱちと爆ぜた。

林看守は四つん這いになりながら逃げ、立ち上ろうとしてもがいていた。

首から下げている呼子笛を手にとろうとした。

玉江は次の行動に移っていた。

背後からのしかかり素手で林看守の首を締めた。最初の一撃が強烈だったのか抵抗力を失っていた。首に食い込んだ玉江の手指を振りほどこうとし両手を首のところに持つてきたが、わずかに爪を立てただけで、やがて、ぐったりし絶命した。

玉江の行動は沈着だった。傍らの防火用水を汲み、七輪の火を消した。無人になった看守詰所に入り、控室にとまつすぐにすすむ。鍵束が壁に掛かっていた。緊急用のしるしなのか、赤い札が格納庫用の鍵にはつけられていた。

再び、玉江は消防器具格納庫に立っていた。

南京錠を外す。格納庫内には、木梯子と、消防用ホースが入っていた。木梯子は三メートルほどもあり、ホースもぐるぐる巻きのものであった。

玉江は木梯子を赤煉瓦塀に立てかける。

塀の高さは五メートルはあるからそれだけでは塀を越せない。それに塀の高さに立ったとしても五メートルから下に飛び降りるのは危険でもあった。

足でもくじけば逃走は不可能になる。

布製の消防ホースをとり出し、まず、木梯子の端を固定させるために、調理場前の水揚げポンプと木梯子をホースで連結した。

木梯子の両端にホースをからませ、しっかりしぼってから水揚げポンプの両端にホースをからませ、しっか

りと縛つてから水揚げポンプの据え付け部にもホースを巻きつけた。足場を固めてから、ホースのもう一方の先を肩にかけ木梯子を登った。

ホースはあらかじめ伸ばしておいたから、女でもひよいと肩に掛けられるほどの重さしかなかった。

いちばん上まで登ったが塀の高さはまだ二メートル以上はあった。木梯子は斜めに掛けられているわけだから、その分低くなっている。

玉江は金具の放水口のついたホースを塀の向うに投げた。ホースは優に三十メートルはあったから手繰（たぐ）り寄せるのに時間がかかった。

手薄な警備陣だったが、いつ、何時（なんどき）、看守が巡回にやつて来るかも知れない。

やつと、水揚ポンプに結びつけたもう一方の端が一杯に伸びた。だが、まだ、木梯子の高さと塀際とは距離がある。格納庫にもどり鳶（とび）遊び道具の一つである長い柄（え）のついた鳶口（とびぐち）を持ち出す。

塀の高さに先端が届いた。

鳶のくちばしをした鉄具が塀の端に食い込む。

くちばし部分が外れないように、向こう側に投げたホースで鳶口の首の付け根のあたりを縛った。布製のホースだから、赤煉瓦塀の表面に密着した。

体を持ち上げた拍子に、鳶口が横揺れになり、嘴（くちばし）の先が外れた。玉江は危うい恰好になり、片手で全体重を支えていた。必死だった。

眼の前に首の部分を縛られた鳶口が宙ぶらりんの状態でぶら下っている。あらん限りの力をふりしぼつて塀の高さに挑んだ。

やつと左手も塀の端にかかった。一気に両腕の力で両体を持ち上げた。上半身が塀の向う側に出ていた。塀の上に立っていた。

あとはホースを伝つて下に降りるだけだった。

塀の上端部にかかっていたホースが玉江の体重のためにはびんと張った。下りは楽だった。するするとす

べり降り、地上一メートルほどの高さから地上に飛び降りた。土の感触が足裏に伝わっていた。

高々とした塀を見上げる。内側とは塀は角度が逆になっていた。外に立つと赤煉瓦塀はやや内側へと傾斜していた。塀に沿って走った。

あたりはほぼ真つ暗闇だった。

先程まで雲間をかすめる ようにして顔を出していた月もいまはすっかり雲間に吞まれている。

途中で走るのを止める。いかにも脱獄囚を思わせる挙動に思えた。何気ないふうに装った。

しばらく歩いてから、玉江は塀から離れた。

北神拘置所の周囲は十メートル先がもう民家だった。家と家との小路に紛れ込む。玉江はまだ未決囚で、自弁衣だったので、脱走囚に見られることはない。

たった今、高い塀を越えて来た女には見えなかった。燈火管制下の闇を伝い、尾形玉江は北神拘置所から姿を消した。

(第三章 了)